慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : Masayuki Okahara "Don't be afraid to be performative! : doing performative social science at Keio University in Tokyo, Japan" Doing performative social science : creativity in doing research and reaching communities. Kip Jones (ed.) Routledge 2022. 147-158
Sub Title	
Author	龍花, 慶子(Tatsuhana, Keiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.93- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

Masayuki Okahara
“ Don’t Be Afraid to Be Performative!:
Doing Performative Social Science at Keio University in Tokyo, Japan”
Doing Performative Social Science: Creativity in Doing Research and Reaching Communities. Kip Jones（ed.）

Routledge 2022. 147-158

龍花　慶子

本論文は、慶應義塾大学社会学研究科教授の岡原正幸による、「パフォーマティブ社会科学」の活動とその成果を紹介する実践史である。同時に、なぜ社会科学がパフォーマティブであるべきなのかを議論することを通して、現在の社会科学の枠組みを批判し、新たな社会科学のあり方を提示する社会科学実践論でもある。

主な内容は以下の通りである。第 1 章は、2015年秋に設立された慶應パフォーマティブ社会学の設立背景とその目的を紹介している。設立の目的は、言語的研究活動だけでは観察・把握・理解・伝達できない人生の側面を探るために、新たな知・経験・学習・発表のスタイルを開拓・開発することである。研究活動の中核に据えるのは、多様なアートワーク実践だ。くわえて、キップ・ジョーンズ（2017）によるパフォーマティブ・ソーシャル・サイエンス同様、全ての実践においてオーディエンスを念頭に置いている。これは、アートそのものの自律性ではなく、観客やコミュニティとの対話による相互解釈的な実践を重視するためだ。この精神を体現している研究の具体例として、観客との相互作用の中で自己生成的な意味を明示した、後藤和樹（2018）と大橋香奈（2018）の映像を用いた博士論文を提示している。

第 2 章では、社会学という営みをパフォーマティブに転化する筆者による二つの挑戦的活動を紹介しながら、「パフォーマティブ社会学」とは何かについてを提示している。活動の一つ目は、2016年から学会に積極的に参加し、「パフォーマティブ社会学」の実践をアカデミックなインスティチューション内に着地させる試みである。二つ目は、大学以外の場所での展示・公演である。続いて、編著書『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』（2014）を参照し、社会学の営みをパフォーマティブに転化する意義を以下のように論じている。現代アートや舞台芸術の特徴である身体性、共同性、現場性は、同時に社会的行為の現実的な形態である。ゆえに、社会学自体もパフォーマティブな実践であるべきなのだ。これを前提として、どのようにして生きられた経験を語り、いかに生きられた社会学として能動的に経験できるのかという問いに対して、社会学を行うことがイベントとして生産され、参加者が身体と感情で示すプロセスそのものを社会学として捉える、という答えを提示している。プロセスを観客のために作品化することを宣言し、その試みが「パフォーマティブ社

龍花慶子「Masayuki Okahara “ Don’t Be Afraid to Be Performative!: Doing Performative Social Science at Keio University in Tokyo, Japan”」『三田社会学』第28号（2023年 7 月） 93－94頁

会学」なのである。

第3章と第4章は、物事を個人の身体的経験として体験することの重要性を論じている。その実践として土屋大輔による二つのプロジェクト「僕たちの丘の上」、「レプリカ・シンフォニー」（2015）と、小倉康嗣、高山真、澤田唯人、荻野亮一、アリナ・プルサコヴァとともにチームで行ってきた、「生と感情の社会学」講座の成果を紹介している。土屋のプロジェクトは、反戦、反核という大きな物語として回収されがちな戦争やヒロシマの体験を、いかに身体性を伴う個人の主観的体験とすることができるかを模索するアートプロジェクトである。2011年から2021年の10年にわたる「生と感情の社会学」講座は、他者と出会い、他者の語りを聞き、それをさらに別の他者に語るライフストーリーパフォーマンスの実践である。そのプロセスにおいて、参加する人びとの身体的、共同的な仕事として、その場で作り出されるのが私たちの現実となっていく。パフォーマンスは、他者の重要性を体現することにとどまらず、自己を揺さぶり、新たな自己へと変化を引き起こす。ゆえに、新しい行動を生み出す演劇やパフォーマンスの制作は、共感、パフォーマンス、対話という一連の教育的実践と考えることができる。演劇によって個人的な体験の再現や、再演がされることで、追体験が生まれ、必ずどこかで繋がっていく。このような「化学反応」によって、自己の物語がコミュニティの物語となり、社会的なインパクトを与えることができるとしている。

「パフォーマティブであることを恐れるな」というメッセージで締めくくられる本論文は、日本において現在支配的である大学院の教育・研究という学問の枠組みを当たり前とせずに、新たな社会学――パフォーマティブ社会学――創出の軌跡と実践例を提示する貴重な論文である。個人の主観的な経験や感情が置き去りにされる現代社会と、現在における学問の枠組みへの問題意識を共有する後進の研究者たちにとって、本論文は、研究の指針となり、かつ既存の枠組みを変革する挑戦へとエンパワーしてくれるものである。課題を挙げるとすると、岡原の研究実践と問題提起を、一人ひとりの経験や感情が尊重される新たな社会創造につなげていくことではないか。しかし、それは簡単に達成されうることではなく、後進に引継がれ長い時間の中で達成されていくことなのだろう。金融危機やCOVID-19のパンデミックを経て、次の社会のあり方が模索されている今日、岡原が実践してきた、身体性と感情、一人ひとりの生きられた経験に向き合うことで生まれる知のあり方が、求められているのではないだろうか。

（たつはな　けいこ　慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程）